



谷
串
州

by Kōsyū Tani

SERGEANT GURKHA

サージャント・グルカ

The background of the entire image is a textured, reddish-brown surface that resembles a rocky or volcanic landscape. The lighting is dramatic, with deep shadows and bright highlights that emphasize the rugged, uneven texture of the rock. The overall color palette is monochromatic, consisting of various shades of red, orange, and brown.

谷
甲
州

by Kōsyū Tani

SERGEANT GURKHA

サーજヤント・グルカ

サーシャント・グルカ

1994年1月30日初版発行

著 者——谷 甲州

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



〒102 東京都千代田区富士見2-13-3

振替・東京3-195208

Phone：営業部▶03-3817-8521

編集部▶03-3817-8451

印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

●定価はカバーに明記してあります。

●落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-872793-1 C0093

サー
ジ
ヤ
ン
ト
・
グ
ル
カ

装丁／辰巳四郎

目次

第一話	サージャント・グルカ	五
第二話	雨の戦線（シンガバハドール・グルン軍曹1）	五
第三話	ゼエイル丘（シンガバハドール・グルン軍曹2）	一〇五
第四話	あらたな出会い（サージャント・グルカ2）	一五一
第五話	スタンリーの牧羊犬 ^{シェパード} （ラジエンドラ・クマール・シュレスタ軍曹1）	一六六
第六話	ダラムシヤラ （ラジエンドラ・クマール・シュレスタ軍曹2）	二〇〇
第七話	旅の終わり（サージャント・グルカ3）	二五七

第一話 サージェント・グルカ

1

すでに乾きかけていた汗が、林に踏みこんだところでまた吹きだした。

一日に何度かやってくる驟雨しゅううとつよい日ざしのせいで、それだけでなく湿度は異様にたかい。空気はねっとりとしめって重く、いくら歩いても風を感じることはなかった。インド平原の暑熱は、山岳地帯のこのあたりにまでおよんでいるようだ。

全身が気持ちの悪い汗にまみれるまで、それほど時間はかからなかった。下ばえが密生している林の中は、うんざりするほどむし暑い。たちこめた熱気のせいで、風景がゆらいでみえるほどだ。それなのに、口の中には一滴の唾つばもわいてこない。

——このままでは脱水症状をおこすかもしれない。

暑さのせいで朦朧もうろうとしながら、片桐徹かたぎりとおるはそんなことを考えていた。あまり若くもない彼にとつて、喉のどのかわきは暑さよりも苦しかった。風土病がこわくて、生水が口にできないせいだ。昼前にのんだ一杯のネパール茶が、最後の水分補給だった。

心身ともに疲労困憊^{こんぱい}していたが、林の中では立ちどまることもできなかった。こんなところで足をとめたら、二度と歩きだせないかもしれない。そんな思いだけで、なんとか次の一步を踏みだしていく。

歩きつづけるうちに、林の先がかすかに明るくなった。その先で林がとぎれているらしく、畑らしい平地がみえた。片桐は息をついた。村にできれば茶店があるはずだから、ミルクティーをのめるかもしれない。そう考えながら、よろめくように歩いていった。

やがて視界がひらけ、片桐は林を抜けだした。あたりには雑穀の畑がひろがっているが、作業している者の姿はなかった。すこしはなれた休み場^{チヨータラ}に、人かげがみえるだけだ。

とりあえず、チヨータラをつくる木陰でひと休みしようと思った。チヨータラは片桐のおぼえた数少ないネパール語で、街道を歩いていると一日のうちに何度も眼にすることがある。このあたりでは菩提樹^{ぼだいじゆ}の周囲に石垣をつむのが普通で、たいてい峠を登りきったところや村はずれにくられている。そして遠い道を歩いて旅する旅人に、日陰とベンチを提供している。

太陽の直射に照らされながら、片桐は歩きつづけた。近づくにつれて、チヨータラの人かげが老人なのがわかった。石垣の上にしゃがみ込んで、のんびりと煙草をくゆらしている。モンゴロイド系の顔つきだが、片桐の貧弱な知識では部族までわからなかった。

投げ出すように荷をおいて、片桐はチヨータラに腰をおろした。汗でじつとりと濡れた背中が、ひんやりとして気持ちよかった。大きく枝をひろげた菩提樹の下は、格好の木陰になっていた。暑さがやわらぐわけではないが、木陰にいるというだけで不思議に気分が落ちついた。

そのせいか、さっきより余裕をもって老人の様子をみることができた。老人はいかにも気持ち

よさそうな顔で、紫煙をはきだしている。むし暑い日の昼さがりに、農作業の手をとめて休んでいる——そんなふうにみえた。

ほんの少し、風が吹いた。菩提樹の葉がかすかに鳴って、すずしげな音をたてた。老人はわずかに眼を細め、それから首をかたむけた。その姿はまるで、風と何ごとかを話しているかにみえた。

それをみた彼は、なんとなく心がやすらぐを感じた。それほど老人の表情はおだやかで、眼はすみきっていた。好々爺こうこうやというのは、こんな老人のことをいうのかもしれない。孫娘の守りでもしているような、いかにも人のよさそうない顔をしている。

すぐには立ち去る気になれないまま、周囲に眼をむけた。チョータラがあるくらいだから、村はちかいはずだ。石垣の最上段にのぼってみると、生い茂った雑草のむこうに数軒の家がみえた。それほど大きな村ではないが、畑のひろがりからすると戸数は意外に多いのかもしれない。

——今日はこのまま、あの村に泊まるべきかもしれない。

照りつける太陽をみながら、ぼんやりとそんなことを考えた。まだ日暮れまでには間があるが、もうそれ以上は先にすすむ自信がなかった。それに次の村までは、かなり遠い可能性もある。あの村に宿屋や食堂はないかもしれないが、頼みこめば民家の軒先くらいは貸してくれるはずだ。

そう考えたことで、ずいぶん気が楽になった。そのせいか、さつきより余裕をもって老人を観察することができた。老人は彼の存在を気にすることなく、あいかわらず風上に顔をむけている。陽にやけた顔の皺しわからすると、老人の年齢は七〇歳ちかくにみえた。だが余分な脂肪のない体つきは、そのような年齢を感じさせなかった。ネパール人にはめずらしいほどの長身で、しかも

がっしりとした体型をしている。おそらく若いころは、いまよりもさらに筋肉質の体をしていたのだろう。

服装に関していえば、これまでに会った村人とかわるところはなかった。着ている物は木綿の質素な民族衣装だし、足もとは擦り切れたゴム草履でしかない。かぶっているネパール帽も、古びて色あせていた。

それなのに老人の姿は、なんとなく周囲からうきあがってみえた。あるいは老人の姿勢に、原因があるのかもしれない。ゆったりとした自然体でありながら、どこか筋のおとった律儀さを感じさせた。さもなければ暑さと疲労のせいで、片桐自身の感覚がおかしくなっていたかだ。

気がつくとき、老人が片桐に眼をむけていた。無遠慮にながめていたものだから、視線に気づいたようだ。片桐はどぎまぎとして、視線をそらした。それから、わざとらしく靴をぬいだ。

さっきから、足の甲にいつものむずがゆさを感じていた。たぶんヒルにやられたのだろう。気がすまないまま靴をぬぐと、靴下が真っ赤に染まっているのがわかった。

片桐はのろのろと靴下をぬいだ。案の定、でかいやつが数匹くらいついていて、なんとか引きはがそうとしたが、血を吸ってまるまるとふとった軟体動物は容易なことではとれなかった。なかば本気で、皮膚ごとナイフでけずりとろうかとさえ思った。

無意識のうちに、舌打ちをしていたようだ。立ちあがった老人が、ゆっくりと近づいてきた。顔をあげた片桐に、人なつっこそうな笑顔をみせた。かなりの年齢のはずなのに、笑うと眼が少年のようだった。

老人は口の中でなにごとかいながら、片桐の足をつかんだ。そしてくわえていた煙草を、無

造作につぎだした。

何かをいう余裕もなかった。片桐がかすかな熱を感じたとき、煙草の火がヒルに押しつけられていた。そして、それでおわりだった。火で焼かれたヒルは、どす黒い血をながして地面に落ちた。

老人は手際よくほかのヒルを退治すると、煙草をもみ消しながらいった。

「無理にとろうとしない方がいい。下手をすると、傷口がひろがって化膿することがある……。

いゃておくが、ヒルよけのためなら足ごしらえを嚴重にしても意味がない。それよりは、素足にゴム草履をはくのがいい。簡単にみつけられるし、処置もはやいからな」

きれいな英語だった。インド人に多い、ききとりにくい発音ではない。そのことだけで、老人がかなり教養のある紳士なのがわかった。インドやネパールでは、田舎道を歩いていて英語を話す老人と出会うのはめずらしくない。

どうこたえていいのかわからないまま、片桐は曖昧な微笑をうかべた。これまでの経験からすると、外国人に話しかけてくる人間はたいてい何か下心があった。そして親切にされたときには、金を請求されるのが普通だった。

それが頭にあるものだから、うかつに返事ができなかったのだ。あまり考えたくないことだが、この老人もその種の下心がないとはいいきれない。ずいぶんながくインドを旅してきた彼は、すでに猜疑心の塊になっていた。

口ごもっている彼に、老人は屈託のない笑顔をみせていった。

「ひどく疲れているようだが、どこまでいくつもりだね。お若いの」

そのひとことで、片桐はすこし警戒をといた。息子に話しかけるような老人の口調には、金を無心するような卑屈さはまるでなかった。彼はおずおずといった。

「ムクチナートまでですが……」

老人は、少し首をかしげていった。

「ボカラから、歩きはじめたのか？」

「いえ、ボカラにはいっていません」

ムクチナートにむかうこの街道は、ボカラを起点として歩くのが一般的だった。だが片桐の場合は、すこし事情がちがっていた。まちがって途中の街でバスを降りたために、そこから直接歩きたのだ。

いったんは次のバスを待つことも考えたのだが、すぐにその街から歩きはじめることに決めた。別の旅行者からもらった地図によれば、その街から出発した方が街道の起伏が少ないことがわかったからだ。しかもその街を起点とする裏街道を利用すれば、ボカラを経由するより丸一日はやくムクチナートに到着できる。

老人は黙って彼の話をきいていたが、やがて不思議そうにいった。

「バイラワで国境をこえて、シャンジャから直接あるきだしたというのか？」

シャンジャというのが、その街の名前らしい。彼はうなずいた。すると老人は、ますます怪訝けげんそうな顔でたずねた。

「するとトレッキング・パーミットは、どこで取得したのだ？ バイラワではパーミットがとれないはずだが」

今度は片桐が怪訝そうな顔をする番だった。トレッキング・パーミットといわれても、何のことだかわからない。文字どおりに解釈すれば、山岳地帯を旅行するための許可証ともうけとれる。だが国内旅行をするのに、そんな許可証が必要なのだろうか。この国では。

片桐が疑問を口にする、老人はあきれたようにいった。

「信じられないな……。トレッキング・パーミットのことも知らないで、ムクチナートにいくつもりだったのか。よく警官に追いつかれなかったものだ」

片桐は不思議そうに老人をみた。そんな話は寝耳に水だった。どうやらネパールではパーミットを所持していないと、奥地への入域を無条件に拒否されるらしい。山岳地帯の治安が特に悪いというわけではないから、観光収入をえるための方便なのだろう。

おそろおそろ片桐はたずねた。

「ここからムクチナートまでの間に、パーミットの有無を検査されるでしょうか」

「少なくとも三カ所のチェック・ポストが、こことムクチナートの間にある。最初のひとつがあるのは、ここから一時間ほどのところだ。所持していなければ、そこから先にはいけない」

「それでは……どうすればいいのです。私はどうしてもムクチナートにいきたいのですが」

だが老人は、あっさりといった。

「いちどボカラにもどって、パーミットを取得するしかない。いますぐ引き返せば、明後日の午前中にはボカラにつくだろう。ノウダラをこえれば乗合ジープの便もあるから、うまくすれば明日中につけるかもしれない」

片桐は茫然として老人の顔をみていた。あまりのことに、口をきく気にもなれずにいた。ここ

まで彼は、丸二日かけて街道を歩いてきた。わずか二日だが、引き返すとなるとその距離は絶望的なほど遠かった。

もしもポカラに引き返しても、もう歩きだせないのではないか——そんなことさえ考えた。それどころか、落胆のあまりポカラにさえたどりつけないかもしれない。ここまで何とか歩いてこれたのは、わずかでも目的地にちかづいているという心のささえがあったからだ。

2

片桐がムクチナートへの旅を思い立ったのは、インドの田舎街で出会った旅行者の話がきっかけだった。

ポカラから北に一週間ほどいったところにヒンドゥの聖地があつて、この時期には巡礼や行者があつまるのだという。しかも秋口まで滞在すれば、チベット仏教の祭もみれるだろうとその旅行者はいった。

そのとき片桐は、とりあえずインドから出国する必要にせまられていた。それ以上はビザの延長が不可能なほどながくインドを旅行したために、第三国にでてビザを再取得しなければならなくなっていたのだ。

第三国への出国といつても、短期間の滞在では意味がない。彼の場合は、すくなくとも一カ月はインドをはなれなければならないらしい。あまりに変則的で長期にわたるインド旅行をつづけたために、そんな処置が必要な状態になっていたのだ。

だから国境をこえたあとカトマンドゥへ直行してもよかったのだが、長期にわたる首都の滞在はどうしても生活費がかさんでしまう。それくらいなら、少しでも生活費の安い田舎にいたほうがいい。外国人がほとんど入ることのない山奥ならさらに好都合だ——そんなことを考えていた矢先に、聖地の話を耳にしたのだ。

聖地ときいて、彼は少しばかり興味をそそられた。インドでさんざん探してみつけられなかったものが、そこにあるかもしれない。それほど期待していたわけではないが、カトマンドゥにずっと居座っているよりはましだろう。そう思った。

もちろんそれだけなら、山道を一週間あまりも歩く気にならなかったはずだ。ところがネパールに入国したあとで、別の旅行者が耳よりな話をきかせてくれた。片桐の知り合いらしい人物を、ムクチナートでみかけたというのだ。おどろいて何度もきき返したが、容貌や体格の特徴はびつたりと一致した。それをきいた片桐の胸はさわいだ。あれほど特異な容貌をもつものが、そう何人もいるわけがない。

ラジェンドラという名のその人物は、ヒンドゥ教の行者だった。彼とはインドの巡礼宿ダラシヤラにいたころ出会い、毎晩のように語りあったものだ。

もしもダラムシヤラで別れずにいたら、いまごろ片桐は彼にくっついてムクチナートにいたかもしれない。それほどラジェンドラは、片桐に強烈な印象をのこしていた。

ところがラジェンドラは、ある日突然ダラムシヤラから姿をけした。同室のものはだれも行方を知らなかったし、その後も消息をきくことがなかった。文字どおり風のように、どこかへ旅たったのだ。

そのラジエンドラが、ムクチナートにいるという。そのことを考えるだけで、矢も楯もたまらなくなった。

あるいは精神的な不安定さが、彼を衝動的な山地旅行に踏み切らせたのかもしれない。経済的な余裕がなくなったことも、焦燥感をつのらせていた。あるいはラジエンドラと会うことで、不意なまま終わりにかけていた旅を終わらせようとしていたのかもしれない。

目的のない旅——といえばきこえはいいが、要するにインドを放浪したあげく最初の目的を見失い、ネパールに迷いこんだともいえる。

そして片桐は、カリ・ガンダキ川にそった街道を歩きはじめた。目的地であるムクチナートまでは、川にそって一週間ほど北にさかのぼらなければならぬ。金さえだせば飛行機も利用できたのだが、貧乏旅行者にそんな余裕があるわけもなかった。

だが歩きだして数時間のうちに、片桐は後悔することになった。山地の旅行は想像していた以上に苦しく、たいして中身の無いザックが投げ出したくなるほどの重さに感じられた。トレッキングと称する徒歩旅行が、実は登山とおなじ重労働だと気づくまでそれほど時間はかからなかった。

老人と出会った二日めの午後には、心身ともに疲労困憊の状態になっていた。準備も心構えも不十分なまま踏破するには、ネパールの山岳地帯は峻険すぎたのだ。しかも季節は雨期の終わりで、山地旅行には最悪の季節だった。

雨期といっても、たえまなく雨が降りつづくわけではない。一日の大部分は太陽が照りつけて、たえがたい暑熱と湿度は旅行者を消耗させる。かと思うとたたきつけるような豪雨が降りしきり、